

恋愛に練習は必要か？

羽成唯

隣のエロ男は今日も元気だ。

愛と快楽に満ちた行為、当事者同士には何にも代えがたいだろう、しかし第三者、あるいは覗きを望まぬ者にとっては苦痛以外の何物でもない。建売の一戸建て、隣家との距離2メートルでは避けることのできない現実。幼いころは好ましかったこの距離は、いつから疎ましく変わったのだろう。

先程届いた宅急便のダンボールに意識を集中しようとするが、隣家からの騒音には抗えず、いつそこの窓を全開にし、罵声か水でも浴びせたら、少しは気が休まるのではないか。

いや、平和を愛する心の持ち主は、そんなことで安らぎは得られない。

自分の性格も疎ましい。

かさっ

隣室とは違い静寂に包まれたこの部屋に、悪魔の存在を感じた。

部屋は綺麗にしている、つもり。

食べ残したり飲み残したり、靴下や肌着を放置したりせず、少しでも彼らが好むものを部屋に置くことは避けていた。唯一窓はここ数年閉じられたまま、空気の入替えを拒み続けていたけれど、空気清浄器は使っていたもんね。それもこれも全ては彼らとの遭遇を避けたいがためだ。

どこから？

そして何種？

がさがさ、とその音はまさか手元から聞こえた。

「きゃー！」

手から弾かれたダンボールが弧を描き落ちてくる時間、開いた蓋の間から黒い物体が解き放たれる。

最強の黒。

やつらの一番嫌いなところ、それは人を人とも思わぬ行動。人間に見つかったら、やつらの命などひとたまりもないというのに堂々と反逆するのだ。例えばこういう場合、10中8・9、人に向かって飛んでくる。身構えたが幸い今日のは少し賢いようで、一目散に遠くの窓枠にぴたりと張り付いてくれた。

それからはお互い牽制の時間、一步も動かず。

えっ、もしかして私は、このまま母親が帰宅するまで、監視を続けなければいけないのか。なぜなら存在を知ってしまった以上、見失うわけにはいかない、決して。

隣の窓が勢いよく開く、音。

「香。」

私を呼ぶ声がしたので、目だけそちらに。

遮光カーテンでなにも見えないが、その声はエロ男、もとい幼馴染の陸。

しかし、返事も動くことも拒む。

「おい、香。」

煩い、黙れ、刺激するな。

「ちょっと窓を開けろ。」

絶対いや。

「出たんだろう？」

「出た。」

あっ、つい返事をしてしまった、ので慌てて黒を目で制すると、なかなか賢い個体で、大人しくしている。

「退治してやるから、窓開けろよ。」

「結構です。」

お前に頼むくらいなら、母の帰りを待つ。

い、いや、待って。

父の単身赴任を機に第二の人生を謳歌中の母は、仕事に燃えるキャリアウーマン、最近の帰宅時間は、昨日21時30分、一昨日21時、一昨日22時30分。今が、と時計を見ると16時45分なので、え、ええ、えー。

「お袋さん、居るの？」

何、その絶妙なタイミング。

「いません、けど」

それが何か？ってな口調で返す。

「へー、じゃあ、自分で退治するんだ。」

あちらもツンデレ風。

こいつは私の知る範囲では最強のGハンター、今まで取り逃したところを見たことはない。G並みの生命力を誇るのでGの気持ちは良く分かるのだろう。

どちらのGがマシなのか、究極の選択を強いられたが、ちょっと待って

「私の事は気にせず、続きをどうぞ。」

良く考えたらこれは二人の問題ではなく、三人の問題。

「お前の悲鳴で萎えた、もう無理。」

「そう言わず。」

「いや、無理。」

「いや、がんばって。」

「なんなのよ、一体」

「ああ、悪い」

あちらの窓辺では密談が始まり、もめごとの様相。

いやいや、がんばれよ、私は彼女に恨まれるのはごめんです。

その時、おとなしく賢かったはずの黒に通電。

すすすすすと忍者のように壁を上昇、そして斜めに部屋の奥隅へと進むと思いきやまた手前に、意思のない迷走を続ける姿を眺めていると、血の気が引き眩暈がする。

気を失ってはいけない。

ここで気を失えば、やつは必ずやこの家のどこかに姿を隠し、皆が寝静まった夜中活動を始めるのだ。食糧のみならず、私の歯ブラシを愛でたり、布団を徘徊し顔面を横切ったり、ああ、想像しただけで気を失う。

いやいやいや、ダメだ。

意識をしっかりと持とう、がんばれ私。

やっぱダメ。

へなへなと絨毯にうつぶすと、現実から逃避するように頭を抱える。

見えなければいけないのと同じ。

「おい、香、窓開けろって。」

「無理。」

「窓に居るのか？」

「見えません。」

「見失ったのか？」

「見たくないの、私、見たくないから。」

「見なくていいから、窓だけ開けろ。」

「腰抜けているから、無理。」

「玄関は？鍵は開いてるか？」

「閉ってるよ、危ないじゃない。」

「いや、だからここ開けろって」

「私、帰るから。」

「あ、ああ、悪いな。また」

あーあー、彼女怒っちゃったよ、帰っちゃったよ、いっけないんだ。

「おい、香、窓の鍵は開いてるか？」

「あんたのおかげでここ数年開かずの窓なんだけど。」

素晴らしく良く響く低音が出た。

「悪かった、謝るから開けてくれ、いや、ください。」

「いいの、私ここで死ぬから。」

「おい」

「全部扉を閉めて、ここから出られないようにして、二人で干からびて死ぬの。」

「なんで嫌いな奴と心中する気満々なんだ。お袋さん今日は帰らないのか？」

「分かんない、お母さん最近仕事に燃えてるから、もう私の事なんてどうでもいいのかも。」

「いやいや、お婆さんの連絡先教えろよ、連絡してやるから。」

「たった今仕事に燃えているって言ったでしょ！なんで人の邪魔するの。」

こいつ昔からちょっと人の話を聞かないところがあるんだよな。

「お前、たいがいにしろ、窓突き破るぞ。」

気が短いのも相変わらず。

ああ、もう面倒くさい！

すくっと立ち上がると、勢いよくカーテンを開ける。

陸は窓から身を乗り出していたが、私の振る舞いにちょっと身を竦めたが、すぐゼスチャーで鍵開けるとやるので鍵を開け、窓開けるとやるので窓を開け、窓から避けるとやるので避けると、窓枠に足を掛け躊躇わずジャンプする。

子供の頃と同じようにひらりと舞い降りるかと思ったが叶わず、足を引っ掛け室内に転がり込む。

「痛でででで。」

足の甲を押え部屋中を転げ回る。

「もう若くないのね。」

「ひどくね？」

涙目になりながら甲にふーふー息を吹き掛ける姿は、大きくはなったが小さいまま。いや、ちょっと待って

「なんでその恰好？」

上はグレーの肌着、下は同色のボクサーパンツ。

「着てきただけ、気が利いてるだろ。」

妙に自慢げだが

「うら若き乙女の部屋に来るのに、下着？」

「うら若き？俺がもう若くないんだから、お前ももう若くない。」

彼の論理的思考に歯ぎしり、同い年は同じだけ年をとる。

しかしながら、陸の胡坐姿を眺めると、どうしてもある一点に気が行ってしまい、目のやり場に困る。そこは彼の言葉通り、大人しいように見受ける。

思えば、陸の姿をこの距離で見るのはどれくらいぶりだろう。高校から進路は別なので、少なくとも5年、この部屋に来るのは中学3年？あるいは2年以来だろうか。

「部屋変わったよな。」

陸が室内に目を走らせるので、それを追うように一緒に眺めてみるが、毎日過ごしている者はそ

の変化に疎く

「そうかな。」

「そうだろ、毎日びたーっとカーテン閉めてりゃ、中の様子なんか分かるまい。」

「誰のせいだと思ってんだ。」

ああ、今日は低音の調子がすこぶる良い。

私の脅しに陸はほんの少し後悔を表したように見えたが、気のせいかもしれない、彼にはその理由がない。

「そういえば、彼女怒らせちゃったみたいで。」

「彼女じゃないから。」

彼女じゃない。

「そうなんだ。じゃあ、問題ないんだ。」

「だす。」

いつからこんな軽い男になったのかと思う。

昔の陸はもう少し清く、もう少し私寄りだった。

しかし中学の頃、頭の程度は大差ないが、人としては違う部類なのだと気がついた。

陸は背が高く運動ができてイケメンの社交家、私はごくごく平凡で雑踏に溶け込んでしまう消極的な人間。幼い頃には分からなかった違いを、理不尽に思いはしたが、案外素直に認めた自分がいた。

だから、同じ高校に通うこともできたが、私はあえて女子高、女子大を選び、自ら陸との関係にカーテンを引いた。

見なければいけないのと同じ。

「なんか」

と陸が言う。

「何？」

「茶ぐらい出してくれても良くね？」

茶の無心？

「ちょっと待って、良く考えたらあんたまだ仕事終わってないじゃない。」

最強のGハンターの登場に気を許しすぎた。

「ああ、そういえばどこ？」

「どこって」

最後に見失ったのはあの壁、見上げるとそこにはすでに居ない。絶望が足元から込み上げ、ぞわぞわしてつま先立ちをし、前にも後ろにも横にも行けない。

「そいつはどこから来たん？」

ダンボールを指さすと、陸がそれを持ち上げる。

「ちょっと、中見ないでよ。」

「えっ、なんか怪しいもの？」

止めたのに見やがる。

「あっ、いな、これ。俺にも見せて。」

今日発売の映画のディスク、先行予約で手に入れたありがたい代物なのに。

「一昨日きやがれ。」

「一昨日は来られない。だってこれ、ゴキ男と一緒に届いたんだろう？」

着眼点に歯ぎしり。

「いやいやいや、でもこれは、初回限定盤だし、ビニールでオールコーティングされているから、それさえ剥せば大丈夫。」

「剥せるの？」

「それくらい」

しばらく見つめ合い

「お母さんなら朝飯前。」

と力なく頷く。

「お母さん、もうお前の事はどうでもいいんだろう。」

「それは、言葉のあやだから。」

夕食も用意してくれているし、本当にごめん、お母さん。

元凶はこの二人、いや一人と一匹。

「それより、お願いだから。早く、早くして。」

この部屋に一人と、あーめんどくさい、二匹の存在は重すぎる。

「なんか悩ましくない、そのセリフ？もう一度イケそ。」

陸は辺りを見回し、武器になるものを探しているようだが、この部屋にあるものは何一つ使って欲しくない。

やがて、ダンボールから中敷きにぐるぐる巻かれたディスクを取り出すと、ビニールを剥がし中身を私に放り、その中敷きを丸め剣とした。唯一OKな品だ、今日のGはどちらも賢い。

私は初回限定盤に頼ずりしながら戦闘の行方を見守る。

陸はベッド下をのぞき込むと、奥に剣をいれ床を2、3度叩く。すると、すす、すすすと黒がベッド横の壁を這い上がってきた。陸は私のうめき声に目を向けて、大げさとばかりに一瞥してから、ベッド上を匍匐前進、再び下に潜ることのないように下方を叩くと、黒はさらに上昇し止まった。

いただきましたという表情、ゆっくり身を起こし、そしてなんとも絶妙なタッチで黒を叩くと自由落下を始め、ベッドに辿り着く前に剣でキャッチした。

こんなに素晴らしいGハンターを、やはり私は他に知らない。

「完璧、天才、早過ぎ。」

号泣したい気持ちを堪え、褒め称えろと

「人を早漏みたいに言うな、ティッシュ寄越せ。」

どーぞ、どーぞ、箱ごとお持ちくださいませ。そうして二度とこの目に触れることのないよう、巨大な雪だるまにしてちょうだい。陸は成仏した仲間をティッシュでぐるぐる巻きにすると拝み、一瞬ゴミ箱に放りそうになったがすぐ思い留まり、ダンボール一式をまとめた。

「家に捨ててくる。」

ああ、なんて気が利くのか、メンズ肌着のブランドカタログみたいにかっこよく見えてきた。

ティッシュ、剣、ダンボールを順に部屋に放ると、最後はその身を窓枠に寄せ

「絶対ここは閉めるなよ、戻ってくるからな。」

「戻ってくるの？」

素で聞いてしまったが、失礼か？

「茶ぐらいごちそうせい。」

「畏まりました、お待ちしております。」

平身低頭、おでこを床に擦り付けながらお見送りしたので、ご納得いただけたよう、すぐ身をひるがえしジャンプ、しかしやはり足をぶつけたようで、痛がりながら、でもあちらの窓下はベッドだったので軟着陸。

「やっぱ玄関から行くわ。」

「こちらは閉めても宜しいですか？」

「カーテンは開けておけ。」

と言いつつ、部屋の扉から消えた。

なんでなのと思いつつ、でもとりあえず言われた通りにすると、まずは部屋の消毒を開始する。アルコール除菌スプレーとフローリング用モップにドライシート。空間にスプレーすると、ちょっと吸い込んでちょっと咳き込む。次に壁、床を一通り、スプレーしては拭きスプレーしては拭き、とにかく自分が納得するまで作業を繰り返そうと思っていたが、案外早く玄関チャイムが鳴らされたので、ちっと舌打ちし向かった。ピンポンピンポンうるせーなと思いながら鍵を開けると、服を着た陸が立っている。

「あら、お召替えを。」

「掴まりたくないんで。」

Gらしく壁を伝ってくればいい。

「ずいぶん、お早いお越しですね。こちらはまだ準備が整わず」

スプレーを握る手に力が籠る。

「シャワーは浴びてきた。」

そういえば幾分髪の毛がしっとり。

「それでは、いえいえ、さあ、どうぞ。」

招き入れると

「お邪魔します。」

と靴を揃えて上がった。そんなところは昔のままだが、靴はスウェードになり大人びた。

「リビング、ダイニング？」



「台所でいいよ、半自宅みたいなもんだから。」

「家出期間、長すぎ。」

「勘当くらってたんだろ？帰りたくても帰れなかった。」

言葉のあやかかもしれないが、一応突っ込んでみる。

「帰りたかった、んだ。」

「俺がここに来たくない理由って、あるのか？」

私の問いが陸を真顔にさせたので、少し怯んだが

「来たくない理由は、ないかもしれないけれど、積極的に来たい理由もないかなと思って。」

「冷たい女。」

その言われ様にちょっと憤ったが、慣れた様子でダイニングに腰かける姿を見て留めた。

「何がいい？」

「何でも。」

陸は、そのことより部屋を眺めることに意識が向いているようだったので、まだ好きかどうか分からないが、サイダーを出してみる。

「やっぱりこれか。」

懐かしみ笑顔を見せる。

陸のお母さんは炭酸が嫌いなので、自宅では飲んだことがないと言い、家に来ると必ず飲みたがったように記憶している。逆に家の母はコーヒーが苦手だったので、私が陸の家に行くとクリーブとお砂糖をたっぷり入れたそれを良く飲ませてもらった。

「我が家のひちゅ需品だから。」

「必需品。お前、相変わらず滑舌悪いよ。」

「これが私の魅力の一つです。」

「妙な自信も頑固さも変わんねえ。それで皆、分かってくれるの？」

どうかなあ、そもそも自分の性格を、周りに理解してもらおうと努めるだろうか？気が合うから、好きだから一緒にいるのでは。

「なんで、女子高行こうと思った？」

急に、しかもえらい話が遡って戸惑ったが、

「そこに、女子高があったから。」

とりあえず答えてみた。

陸は一瞥、

「格言聞ってるんじゃないっつーの。」

ごくっとサイダーを半分。

「俺達、成績似たり寄ったりだったから、絶対同じ高校だと思ってたのに、もしかして避けた？」

あんたと同じ高校に行きたくなかったから、というのは本心ではないが、選択の重要素だったのは事実。

しかし、そんな複雑な乙女心を吐露しても意味がないと思えた。

「女子高、良かったよ。」

あの3年間は心の平穏が保たれて、ありのままの自分を満喫できたのだ。

「大学は、なんで女子大？」

「そこしか受かんなかったから」

「嘘こけ、おばさんに聞いた。」

「えっ、繋がっていたの？」

「なんで切れるんだよ。」

それもそうか、私だっておばさんと会えば立ち話位するし。

「俺の大学受かったんだらう？」

「まあ、ダメもとで。」

「記念受験するような大学かよ。」

「いや、本当にぎりだったから、落ちる気満々だったんだよね。」

「ありがたく来れば良かったら。」

「女子大、良いよ。」

ありのままの自分を堪能しているさ。

「だから、絶対避けてるだろ。なんか俺、お前に嫌われるようなことしたかよ。」

こいつ、どれほど無自覚なのか。

「しないとでも？なめとんのか。」

低音最高。

「あ、いや」

戸惑ったので、一応自覚はあるのか、よほど怖かったのか、しかし、かろうじて踏みとどまるように

「いや、違う。そもそも中学時代からちょっと変だった。」

「それって、中二病じゃないの？」

「昔からそう、他人事のように言うな。」

「うーん、だって私そんなにフレンドリーなタイプじゃないって気が付いちゃったんだよね、あの頃。」

「俺とお前の間で、フレンドリーとかフレンドリーじゃないとかって、何なの？」

何なのって聞かれると、改めて何だろうって考える。

「えっ、でも、幼馴染って、一生仲良くしなきゃいけない法律とかあったっけ？」

「すっとぼけてんじゃねーぞ。」

「いやいや、夢見過ぎでしょう、少年漫画の読み過ぎじゃ？」

「南ちゃんなのか、お前の役割は？」

「そこまで、ずーずーしくないです。」

身の程を弁えたからこそ、こうなっているのでは？なぜ私が責められる。

「陸は、中学時代楽しかったでしょう？」

「お前は楽しくなかったのか？」

楽しいか楽しくなかったかと聞かれれば、それは楽しかったが、胸に蟠りがあったのも事実。

「中学時代、何かあったか？何で、俺のこと避けるようになったんだよ？」

何でと聞かれたら、それは。

陸の顔をまじまじと見つめると、答えはすぐ浮かぶ。

私にとって陸は特別な存在だったのに、陸にとってはそうじゃないと気付かされたから。

ただ、気づかされたというのは正しくないのかも、陸がそう表したわけではなく、私が勝手に感じてしまったのだ。

しかし、そんな複雑な乙女心を吐露しても意味がない。

「避けてなんか、いないよ。」

「嘘を言え。」

でも、もし陸も私を特別に思ってくれているなら、彼の方から何かしてくれるのではないかとも思っていた。

今思えばとても楽観的、それを中二病と言う。

この話は、あまり突き詰めたくない。

「サイダーのお替りは？」

話を逸らすと、陸は明らかに不満を表したが、

「それとも、違うものがある？」

それには負けずにもう一押し、さらに答えを待たず何かを出すため腰を上げようとする、陸は息を吸い大きく吐き出す。

「映画見せてよ、さっきの。」

何？

「あれは、今日届いたばかりなの、持ち主が見てないの。」

冗談じゃございません。

「だから、一緒に見ればいいんじゃない？」

あれっ？

「ビールないかな、ピザとか取っちゃう？」

おい、なにわくわくしているんだ。

「ちょっと」

「俺は命の恩人だぞ、それくらいしても罰は当たらない。」

「そんな、おおげさな」

「棺を持ってきてもいいんだが。」

うっ、いや。

「いいところだったのを邪魔されたし」

「放っておいても良かったって」

「本当かよ？」

棺の方角に向ける顔、うっ、いや。

「わかんない。でも、相手を怒らせてまでとは」

「でも、萎えたものは無理。」

「確かに元気なかったもんね。」

「見たんかい。」

「目に映っただけ、そこに山がなかったから。」

陸の不審全開の眼差し

「お前、彼氏居るの？もしかしてもう」

「いえまだです、が。」

父親のごとく詰問され、びびってマジレスしてしまった。

「そんなにノリノリで、よく今まで無事だったな。」

「ノリノリする機会がなかったの。」

モチないことまでカミングアウトさせられた。いやまあ、それはよく知っているか。

「へー、じゃあ今日がその機会じゃね？」

あんたまでノリノリすんな。

「一昨日来やがれ。」

「一昨日は来られない。ディスクは部屋？取ってくるのとピザ頼むの、どっちやる？」

「えっ？」

「リビング借りていいだろ？あっ、俺のところにするか。」

「屍の傍にはいきたくありません。」

「55インチ。」

むむむ

「40インチ。3D？」

「3D。」

陸の勝ち誇った顔、スマホ片手にさくさく立ち上がる。

「頼んでおくから、持ってきて。」

「へい。」

気のない返事をする、足を止めスマホを持ったまま指差す。

「絶対来いよ、来ないと」

「畏まりました、必ずやお伺いします。」

平身低頭、おでこをテーブルに擦り付けながらお見送りしたので、ご納得いただけたよう、すぐ身をひるがえし玄関へ消えた。

なんとなくピザが食べたくなっちゃったし、久しぶりに陸の家も見たいかも。

家出少女帰る。

あっ、お母さんごめん、夕食は朝食食べるからね、ちょっと隣に行ってきますとダイニングテーブルにメモを残し2階へ。

ディスクと財布を取ってから、ふと窓に目を移すと、遮るものなく開かれた景色は、陸の部屋の奥の奥まで続き、それはやはり私の知るものとは違う。

「少し部屋変わったよね。」

眩してみた、返事はないけれど。

なに拘っていたのか。

陸を見て陸と話したら、なんだかそれがひどく小さな事に思えてきたが、先程まではそれが全てに値するように感じていた。そして、とても大切なものを失っていたような気がして、少し胸が痛んだ。

「お邪魔します。」

「靴を揃えんかい。」

「これが私の魅力」

頭をぺちっと叩かれた、痛い。

しぶしぶ揃えると許可を得てリビングに招き入れられた。まず目に入ったのは、やはり55インチの迫力。

「大きい。」

「処女なんだろ、言葉を慎め。」

何の話かしら？

眼鏡を渡され、代わりにディスクを渡すと、テレビ前のソファを指すので、真ん中を陣取ってみる。陸がデッキにディスクを入れ、カーテンを閉めて、電気を消しリモコンをテーブルに置くと、体で私を押しソファに腰かけた。

二人の体が触れる場所がテレビの中心線であり、昔と違わぬ距離。

だから、自然互いの頭を持たれ合い、映画の世界に没頭した。

「映画館で見たかったな。」

近未来SF超大作は、迫力の大画面で見るのに相応しい。

「私はIMAXで見たもんね。」

「自慢しい。なら、けちけちせんと貸さんかい。」

映画が終わり部屋の明かりをつけると、眩しさに目を瞬く。すると玄関のチャイムが鳴り、陸がインターホンで対応するとピザ屋さんが到着を告げる。グッドタイミングだわとお財布を取ると、陸と一緒に玄関に向かおうとするが、

「いらね。」

「話が違う。」

「そんな話だったっけ、じゃあ、体で払って。」

「絶対払う、お金で。」

「ごめんなさい、我が家の経費から捻出しますので。」

「だめだから。」

「棺取ってくるぞ。」

もっとだめ。

おとなしくソファに戻り、テーブルの上に散らばる缶ビールやポテチの整理を始め、ピザの場所

を確保するとちょうど到着、蓋を切り離すのが好きなのでそうして、サイドメニューや飲み物を新たに配置して、準備完了。

「いただきます。」

手を合わせ、学校給食のような掛け声、持つのも熱いけれど食べるのも熱い、二人でハフハフ言いながら頬張る。

「そういえば、おじさんとおばさんは？」

そろそろ8時になろうかという時間。

「相変わらず忙しいの？」

おじさんは激務、おばさんは昔からキャリアウーマンで、家の母とは格が違う。

「前ほどじゃない、そろそろ帰ってくるんじゃないかな。」

「久しぶりに会うかも。」

想像したら少し緊張したけれど、おばさんはフレンドリーなので多分大丈夫、でもあまりお行儀が悪いのはよくないよねと、少しばかり姿勢を正すと、なぜか陸も口と手を拭き姿勢を正す。

「だから、帰ってくる前に話し合っておきたいんだけど。」

なにか議題があったっけ？

「なに？」

「俺たちの今後について。」

俺たちの今後？

「なに、その壮大なテーマ。」

ケタケタと笑い飛ばす、ちょっと酔ってるかしら？

「カーテンの閉め方とか、騒音の押さえ方とかのこと？」

秘め事とはいうが、黙ってたら盛り上がらないだろうから、厳しすぎるのは良くないよねと反省してみる。

「カーテンは、おっ始める前に陸が閉めれば良くない？」

「おっ始めるとか言うな、お前本当に処女なのか？疑わしい。」

5年も自然体で生きていこうなる、改悪の見本。

「あいにく」

「いい、もうカーテンを閉める必要はないし、お前が処女かどうかは自分で確かめる。」

なに、言っているんですか、この人は？

「いやいやいやいや、さすがにそんなお安くはできませんよ。」

「だれがお安くしろなんて言った。」

「いやいやいや」

「今日確信できた、俺やっぱお前が良いわ。」

「いやいや」

「だから付き合おう。」

「いや」

「嫌？」

陸の不機嫌を見て、無意識の言葉遊びを反省したが

「ちょっと待って、そんな勝手な」

「勝手じゃなく、話し合おうって言ってる。」

しばし互いの顔を見る、今日二度目の牽制の時間。

そして、やはり行動を起こしたのは相手が先。

「うんと言え。」

剛速球すぎる。

「今の今って、それってあんまりじゃない？」

「20年も考える時間があっただろうが。」

「思春期真っ盛りの、この5年間は無視？」

「お前は、だろ。」

「私だけ？陸もでしょ。」

「俺はずっと考えていた。」

「えっ、他の女の上で？」

「やめれ。」

「あっ、女が上？」

陸がヘタる。

「お前ぜったい処女じゃないから。」

「いいえ、あいにく」

「いいよ、確かめるから。だから、絶対に断るな。」

「それは、話し合いとは言わない、と思うけど。」

「実力行使してもいいわけ？」

陸の鋭い視線にビビる。

「だめです。」

「なら話し合いだろ？」

「気のせいかな？脅されているように感じるんだけど」

「気のせいだ、これは説得だから。」

「だけどね、さっきまで他の女の下にいた」

「おい」

間違えたらしい。

「他の女の上にいる人に付き合いたいと言われても」

陸が頭を抱えながら呟く。

「いろいろあったけど、それが俺の結論なんだ。」

「ちょっと待って、この5年を『いろいろあった』で片づける気？」

「全部説明してたら、夜が明ける。」

「夜が明けたって説明するところじゃない？」

「じゃあ、俺の部屋で。」

「その手は」

「じゃあ、香の部屋で。」

「ざけんな。」

「だけど、言い訳したところで、納得してもらえるのか？」

「今、説得中なんですよ？」

その手間を省いてどうする。

「俺が説得しているのは、どうあれ、俺と付き合っただけのこと」

「そんなのずるくない？」

「じゃあ聞かすが、香が俺を好きでないなら、言い訳する必要があるのか？」

それは

「隣家の騒音に対するクレームを」

「ちゃんと質問に答えろよ。」

はぐらかそうとするのを今度は許してくれない、陸のまっすぐな目が怖くなり、下に逃げる。

私が陸を好きでないなら、陸が誰とどんな関係だろうと、私に言い訳する必要はない。

もし、好きだと言えば、理由を夜通し、そんなに長いのか、説明してくれるというのか。

いや、陸の言うとおりに、私なら納得しないかもしれないな。

やはり陸は私のことを分かっているのだ。

それでも、私は自分の意思を表すこと、自分を顧みることを恐れ

「好きでないなら、必要ない。」

ただ陸の言葉尻を捉えて、答えるのが精いっぱいだった。

陸が小さくため息。

「なぜ、俺のことを避けようとするわけ？」

「だから、隣でエロ騒音出す男を」

「違う、だから中学。そもそも、最初に俺を避けたのは香の方だろう。」

それは

「なんでだ、俺お前に何かしたのか？」

陸が私に何かしたのか。

「してない、でも」

「でも？」

「でも、私とは違う人種だと思ったから。」

「なに、が？」

陸は本当に分からなそうだ。

「だって」

理由を言おうとしたが、どのように説明すればいいのか、言葉が見つからず躊躇っていると、陸は腕を組み目を伏せる。

「俺は、なんで香に避けられるのか分からなかった。目が合っても逸らすし、話しかけても全然乗り気じゃなく、それまでと全然違って、明らかに俺を遠ざけようとしていた。理由を考えてみた



けれどはっきりとは思い当たれなくて、もしかして、自分の存在そのものが否定の対象なのか、と考えついでしまった。」

存在の全否定？

「考えついたらなんか怖くなったし、ちょっと恨みも。」

「恨んでたの？」

「毛嫌いされて感謝する奴居るのか？」

「変態ならではの」

「さらに変態扱いかよ、ほんと冷たいやつだな、お前。」

「ひどい。」

「じゃあ、温かいお人柄なのか？」

「それは、違えますけどね。」

自覚はあります。

「分かっているなら良く考えてみる。俺以外の男は、無理だから。」

「えっ、女として、全否定？」

「俺だって諦めかかったのに、一見さんなんか絶対無理。」

「ひどい。まるで頑固店主みたいな言い方」

「じゃあ、大丈夫なのか？」

「それは」

自覚はありますよ。でも

「夢くらい見せてくれても」

「無理だから。」

「ひどい、じゃあ、なんで陸は私なの？」

その問いに、ひどく憎々しげな表情を浮かべるので、それこそひどくない？

「そこに香が居たから、だろ。」

「格言聞いてないから。」

「格言じゃないから。」

「屁理屈聞いてないから。」

「理屈じゃない。ただ、萎えたんだ。」

「真面目に話している、のに。」

「本当に。香の声を聞いたら、本当になんも出来なくなった。」

「ED」

「その言葉、よく覚えておけよ。」

さらに憎々しげ、怖い。

「だから理屈じゃない、現実。でも、それで自分の気持ちが腑に落ちた。同時にこれは千載一遇のチャンスだろ、一人じゃ絶対ゴキブリ退治できないから。」

「そう言えば、なんで分かったの？」

「分かるだろう？」

「分かるかな？」

「分かったじゃないか。」

確かにと、小さく頷き肯定せざるを得ない。ただ、あちら側だということも否定できないけど。

「香以外に勃たないっていう状況は、今後生きていく上でマズイ。だから、今日はそう簡単に諦めるわけにはいかない、俺としては。」

「私をただ想って生きていただければ」

「だから、南ちゃんなのかお前は？」

「ごめんなさい。」

自分の立ち位置は重々承知しています。一生想い続けていいただけるほど、稀有な存在ではないこと分かっています。

「だからとって、私の気持ちは」

陸のふたたびのため息。

「嫌いな男、の家に来て、二人きりで暗闇で、寄り添って映画観るわけない、よな？」

「幼馴染、だもの。」

「幼馴染は仲よくしなきゃいけない法律はないんだろ？」

「人情として」

「お前が人情家なら、カーテン閉ざして悪態つくわけがない。」

本質をずばずばついてくるけど、それが好きな女に言うことなのかと懐疑心。

「だから、もう、ややこしいことを考えるのはやめようと思う。お前は昔と何一つ変わってない、俺の知っている香のまま、だからどこかでボタンを掛け違えただけで、俺のことは嫌いじゃない。」

それは、正しい。

私は陸のことが嫌いじゃない。

「俺は香が好きで、香も俺が好きはず。」

それも、正しい。

後半は間違いなく。

私が悪態をつかず何も言わないので、陸は気が抜けたように、でも小さく微笑んだ。

その笑顔を見たら、私も腑に落ちてしまった。

「この問題、俺も悪いが、香も悪いだろ。」

「そう、かな。」

「俺はお前が原因だと思っているし、お前は俺が原因だと思っている。なら、相殺にして前に進めば良くない？」

しかし、そう言い切るには、なんだかしっくりいかないんですけど。

「この5年、めちゃくちゃ満喫してなかった？」

「香だって満喫したんだろう？女子生活。」

満喫したかしなかったかと言えばしたが、

「でも、なんか違う。陸の楽しみ方とはずいぶん違かったんだけど。」

「俺は楽しんでたわけじゃない、練習してただけだから。」

「何を？」

「香との関係。」

何、ですって？

「失敗できない相手といきなり本番だなんて、それこそどんだけ自信家なんだ？」

いやいや

「この5年間、俺はそれなりに努力してきた、だから多分大丈夫。」

「何が、大丈夫？」

陸がほくそ笑む。

「試してみろって。」

手が私に伸びて頬に、ちょっと抓られた。

「痛いです。」

「悪い。」

やはり恨まれているのか。

やがて体ごところちに、陸の影が私を覆う場所までやって来て、

私が両手でがっちりガードしたので、戸惑う。

「私も練習してこようと思うから、もう少し待ってくれる？」

陸の動きが止まり

「そんな、自信家じゃないから、私も。」

体がソファから崩れ落ち、床に転げた。

一昨日きやがれ。